

してきた。

三十人三十様の強烈な個性をもったクラスであった。

その中に、Aちゃん——幼児期の大手術のあと、ことばがはっきりとしやべれなくなり、咀嚼や指先の機能が多少思うようにならない、がいつもニコニコ笑顔を絶やさずやる気充分の女の子——がいる。ここでは、クラスの中でのAをめぐるあれこれの中で、心に残るいくつかの場面を、私の対応も含め考察したいと思う。

「ジャンパー、わすれてるよ」

入学して一週間。学校生活の一通りの約束事を覚えてつある頃のことである。持ち物も増え、学校に置いておくものは、たとえば、道具箱、算数セット、粘土は、ロッカーの下端に、ぞうり袋、体操着、ジャンパーは廊下の物かけに、台ふきは机の脇に、という具合にそれぞれ分散収納する。三十人とは昔に比べれば少ない人数のようだが、それでもひとつの教室にこれだけの学校生活必需品を置き、その間を、スピード感あふれる元気一杯の

子ども達が動いている。ちょっと整理が雑然としてくると、「なくなっちゃった」「だれかのとまちがえちゃった」に始まって、怪我につながるトラブルも起こしかねない。子ども達も、「いざお勉強」とランドセルをしょって勇んで学校に来たものの、入学してしばらくは、こんなことも含めた集団生活の基本的なルールを覚えるのが、「お勉強」の第一歩なのだ知らされる。

一日のおわりのひと仕事、「おかえりのしたく」——。

「お手紙は、四つにたたんで連絡帳の袋にしまつて」

「トイレにいききたい人は、どうぞ」

「上着を廊下にかけてある人は、わすれないで……」

等々、最後の指示をする。子ども達は一斉に、真剣な表情までする子もいて、自分のやるべきことをやるべく動き出す。これがもう少し時がたつと、トイレに行きがてら廊下で帰ってからの遊ぶ約束をする子がいたり、ロッカーの前でプロレスごっこをしたり、動きの中に「遊び」が入ってきて、なかなか「さようなら」にこぎつけ

なくなるのだが、このころの一年生は、まだまだ言うことをよく聞く「いい子」の面持ちである。

皆より、少しやることは遅くなってしまふけれど、言われたことにひとつひとつ肯きながら聞き入り、自分のペースで確実にやり通していこうとするAが、廊下での用事を済ませ教室の入口のところで立ち止まっている。部屋にいる誰かに向かって声を出して手まねきをし、次に廊下の方を指さしているのである。言われた子はしばらくして気がつき、「あそうだ。」というふうにしてあわてて廊下に出ている。つまり「○○ちゃん、ジャンパー」とりにいくのわすれているよ。」ということだったのだ。

帰りの仕度のにぎわいの中での、一瞬の小さな出来事だった。だがその一瞬の光景が心にひっかかった。そしてそれは、やや大げさに言えば、Aを受けとめる私の姿勢が問われる出来事だったのだという思いに至る。入学当初、Aのお母さんにも、三十人の中のひとりとしてみていきたい。それ以上の扱いはできないししたくない。

というようなことを伝えたつもりだった。Aもみんなもそれぞれが長所短所をかかえた、そして成長しつづけている子ども達である。Aひとりを特別扱いすることはやめよう。と自分も心づもりしていたつもりだった。が、そうした頭の中で考えていたことの、意識化されたことの奥の部分では、Aには、他の子より手をかけてあげなければいけないし、他の子に助けってもらい、側だけの存在として、特別視していたこと。そのことが、この光景にふれ、明るみに出されたのだ、と気づく。

その時以来、Aを見る目が少しはクリアになったと思う。Aは、けっこう世話好きで、そうじや給食の当番の仕事にも意欲を示し、積極的に周囲とかかわりを求めつついていくタイプなのだということがわかってきた。

「チーズバーガー たべられない」

クラスの子ども達に、Aのことを初めからあまり詳しく説明することはしなかった。入学当初、ひとりひとり名前を呼んで、「ハイ」と返事をしてもらう時間のAの

番になった時に、「あまりスラスラおしゃべりできないんだよ。」というくらいに簡単に話しておいた。子ども達のストレートな出会いを大切にしかかったし、しなやかな心を持つ子ども達に、かわり方の押しつけになるようなサジェスチョンは、できるだけ避けたかった。Aとのやりとりの実際の場面で、私が一緒に立ち合える範囲で、よりよい友人関係になっていくためのかわり方を一緒に考えていこう、そんなふうに思っていた。

給食が始まった五月のある日のこと。Aがいきなり大声で泣き出す。まわりの友だちが見兼ねて、「どおしたの、どしたの……」と集まってくる。そこでの質問とAの肯きからわかったことは、「チーズバーガーがたべられない。」ということだったらしい。

「あら、そうなの。」と私は、聞きはなしておく。すると、その後、四〇五人の友だちがAに言葉をかけ励まし、おそくまでかかってAがチーズバーガーを食べすむことにかかわっていた。

次の日の朝、その時のことを、「やさしくしてあげた

んだよ。」という具合にクラスのみんなに話した。みんなの前である子たちをほめたのは、初めてだった。Aへのかかわり方の実際の場面について紹介したのも、初めてだった。みんなは、おしゃべりひとつせず、これまた真剣な表情で聞いていた。あゝ、こういう話は、敏感に受けとめる子ども達なのだ、その時思った。

そしてその日の給食である。今度は十人ほどの友達がAのまわりをとりまいている。ある子は言葉をかける。ある子はよくれた口のまわりを、ティッシュを出してふいてくれたりもしている。その光景をみていると、それぞれがとも熱心にAのことを世話しているというふうでもなく、Aがごちそうさまをするまでの長い時間、ちよつとフラフラとよそへ行つてまたもどつてきてのぞきこんでいる子あり、私のところへAの様子を知らせに来てくれる子あり、という具合に動いている。その固まりそのものがひとつの“遊び”の様相を呈していた。だからそれは、見ている限りちよつとほほえましくステキな光景だったのだけれど、ティッシュで口をふいてくれ

たりすることまでしてくれるのをみていると、昨日、あえてみんなの前で言ったことが言いすぎだったのかなと思ってしまう。あえて言えば、こうしたことが高じると、かえってAの自立の妨げになってしまうのではないかと。が、考えすぎの私の前を子ども達はさっさと通りぬけ、彼らがAへのこのような行きすぎたかかわりをくり返す場面を、私はその後見ていない。

「えらいねー」

Aは、とにかく粘り強く机に向かってる。文字や文の視写など、時間はかかるが彼女の根気とやる気で着実に力をつけている。しかしながら、ことばをはっきりしゃべれないということは、やはりハンディではある。学習面だけでも、私のAへの手だてについて、力の足りないゆえの反省点は多い。たとえば、テストなどの問題文を私が声を出して読んであげると理解できることがよくあった。聞いて理解する力は充分にありながら、自分の声でその経験を積み重ねることができないため、なかなか

か読解力が身につけにくいのだろう。もっと彼女の声かわりになる機会を多くもてばよかった――。

一学期の中ごろ。国語の、その日二枚か三枚目のプリントを前に、Aがボヤーとしている。同じバタンの内容なので私もつい

「みんなだつてがんばっているんだから、Aちゃんもはやくやりなさい！」

と強い調子で言う。とAは大声で「ウェーン」と泣き出した。私はその大きな声に、ビビる気持ちをかくすことあつて、さらにAに向かって、

「みんなのじゃまになるから廊下で泣きなさい！」

と追いうちをかける。するとAはビタツと泣きやんだ。さすがにまわりの子ども達もしんとしている。そこへいつも元気すぎるほど元気なB君、すかさず

「Aちゃん、えらいねー。」と、Aが泣きやんだことをほめてくれたのである。その後Aは、私の

「もうあとはおうちでやる？」の問いに首を横にふり、プリントにとりついたのであった。

一つのプリントを仕上げるのに、Aは友達の何倍ものエネルギーを費すのだから。だから二枚、三枚と続くと、集中力・体力ともにやはりしんどくなるのだから。

それでも、最後にAをプリントに向かわせたものは、Bのやさしさのこもったひと言だったに違いない。そして私もまた、彼のひと言に救われた。さらに言えば、そんな言葉を発するBに出会い、普段いはずら坊主でしかることも多いBを、見直すきっかけにもなったのである。

「ひとりて できるんだから」

まわりの友達のAへのかかわりの行きすぎは、もうくり返さず今日までできている、とは前述したことである。それは、Aはいろいろなことが出来るということをみんながわかってきたこともあるし、またそれぞれが、学校生活に慣れ、興味が外へ外へと拡がっていつていることもある。それでも中には、Aのことを気にかけて、Aの気持ちをよくわかってくれる女の子の友達がわずかではあるがいてくれて、心強い。

給食当番のAの帽子が後ろ前になっている。給食をもらいに来た子がそれに気付कि、なおしてあげようとする
と、

「Aちゃんは赤ちゃんじゃないんだからね。」

「とお姉さんっぽく言ってくれたのはC子。C自身が、ひとりっ子の甘えん坊で、些細なことでメソメソすることもよくあった。それでも、そういう自分に甘んじているのがいやなんだなと思わせる様子が伺われている。不覚の涙がこぼれる時は、ハンカチをとり出し下を向いてあわててふいたりするいじらしい姿も目にする。だからかどうかわからないが、Aの自立の過程がCにはよく見えるのかもしれない。CにとってAの自立は、自分自身の自立と二重写しになっているのかもしれない。

三学期の最後の大そうじの日。もうお勉強することもなし、大そうじの合い間にちょっと外で遊ぼうということになる。

「その前にげた箱にはってあるビニールテープの名札をはがしてね。」

と楽しいことの前に、ひとつの仕事をもんなに言いつける。なにしろ、新しい二年生になる君たちの使ったものは、ゼーんぶ新しい一年生が、みんながそうだったようにとても新鮮な気持ちで使うのだから、どれもこれもみんなきれいにしておかなければならないのです。——こんな話をして始めた大そうじだった。女の子たちの半数近くがさっそく、

「だんだんとび（とか言つて、昔我々がよくやったゴム段のような遊びを短いなわとびですること）するものこのゆびとーまれ！」

と人集めをしている。その中心人物にAの仲よしもいてAも加わる。Aはなわとびの一端をもってそのグループと一緒にげた箱まで行く。そしてなわとびを片手にしっかりと握り、片手で名札をひっかけがそうとする。他の子はさっさとはがし、くつをはきかえて外に出ようと、なわとびのほう片方の端を引っぱっているのだが、Aがまだげた箱にとどまっています、なわはその間にびんとはられた状態になる。そこへ、いつも穏やかにAに声かけ

してくれるD子ちゃんがAのところへ寄ってきて、はがすを手伝おうとする。するとまたまたCの声。Dに向かって

「Aちゃんはひとりでできるよ。」そして、Aに向かっては「Aちゃん、なわとびはなして、名札とつたらなわとびに入れてあげるから。」

となわを引っぱりながら言うのである。その台詞は、日常的にAと遊んでいない、たとえば私のような立場の者が言えは、やゝ冷たく聞こえるものだったろうが、そこはそれ子ども同志のこと、時にはきびしいのも子どもの世界では常なのだろう。それでも私は、「つめたいんだからね」などと独りごちながら、Aがはがすのを手伝ってしまったのだった。

こんなことがあって、一年生との一年間はあっという間に過ぎていった。

Aの自立は、文字通りまわりの級友たちに支えられていた。一方、Aの自立を支えている彼らもまた、支える

という動きそのものが彼らの内部で自立をすすめていく上での、大きな力となっているのである。そう考えていくと、Aが彼らに支えられる、彼らがAを支える、といった一方的な関係はなく、まさに対等に、支え合い、助け合い、育ち合っていく関係にあると言えるのではないだろうか。

もちろん、私の目の届く範囲に限っても、Aをめぐる友達のやりとりは、必ずしもステキだと思えることばかりではなかった。また、関係がとぎれ、授業中や遊び時間、Aがぼつんととり残されている姿にも、幾度となく

出会った。それらは、個人の力の及ばなさ、足らなさに依るところも多い。また、三十人からの多様な子ども集団に、たったひとりで立ち向かうことで成り立っている、今の現場の限界にも当然ぶち当たる。そして子ども達はまた、学校で家庭でやる事が多くとても忙しい。多くの問題は残されている。

しかし、彼らがまた、新たな出会いの中で成長し、自立していく関係が開発されていくことは、共に過ごす場が保障されていけば可能なのだとも思うのである。

